

東雅臆度抄

『長田夏樹論述集（下）』第15章

（原載：『水門一言葉と歴史』第2号～第4号，1963年9月～1964年6月）

「はじめに」に「白石先生新井君美大人の『東雅』にあやかりその後塵を拝さんがため」とあるように民俗学、方言学成果をも取り込んで「蛇と亀」、「鳥類譜 I・II」に分かつて諸語形を比較言語学的に考察した論稿である。考察の結果を「語意・朝鮮語・日本語・同系/借用の別」の順に記せば以下の如くである。

- ①「蛇・pejam・fěmi・借用」、②「蛇・pejam・wöröti・同源」、③「蛇・kureñi・kutinafa・同源」、④「亀・kepup・kamě・同源」、⑤「鳥・sai・töri・同源」、⑥「雉・skueñ・kigiši・同源」、⑦「雀・č'em・šuzu・同源」、⑧「燕・čjepi・tubame・同源」、⑨「雲雀・pep-sai・fibari・同源」、⑩「雲雀・čjoŋ-ter-sai・sitötö・同源」、⑪「鶴鴿・xarmi sai・kunaburi・同源」、⑫「鶯・koskori・ugufišu・同源」、⑬「鶻・*karchaki・kašašagi・同源」、⑭「梟・puxeñi・fukurofu・同源」、⑮「梟・*orspam・užume・同源」、⑯「鳩・pituri・fato・同源」、⑰「梟・orxi・adi・同源」、⑱「鶻・koxai・kugufi・同源」、⑲「鴝・kermjeki・kamome・同源」、⑳「鶴・turumi・tadu・同源」、㉑「鶴・turumi・turu・借用」

朝鮮語は15・16世紀を中心に18世紀柳僖の『物名考』までのハングル資料に加え、上は『鷄林類事』、下は現代語諸方言の語形が参照されており、語によっては朝鮮語の再構形が示されている。朝鮮語のアクセントへの言及はこれを欠く。「民俗言語学的アプローチ」の副題に見られるように、各動物葬礼等の象徴的儀礼における役割から古義を推測する過程が詳述されている。

上記①②、㉑㉒において、それぞれ①「蛇・pejam・fěmi・借用」、②「蛇・pejam・wöröti・同源」、㉑「鶴・turumi・tadu・同源」、㉒「鶴・turumi・turu・借用」の関係があたかも英語の yard と garden のような「同源語/借用語」の二重語として捉えられている点が注目される。本論文では「日朝祖語形」の具体的な再構形は示されないが、354頁の注6にある如く、論の展開は著者が1959年10月21日の第41回言語学会大会で töri と比較すべきは terk でなく sai であると修正していることと繋がるものである。大胆とも言える比較は、ほぼ時期を同じくしつつ後行するマーチン、ミラーの日朝比較研究と通ずるが、本論文に関して言えば、例えばアルタイ諸語との比較は最小限に抑えられており、対応例の比較言語学的説得性を欠く一方、歴史民俗学的観点から古義を追求する点等、学ぶべきものを多く含む。

（伊藤英人）